

資料紹介 『禪林諸祖伝』所収、「開山行実記」・「妙心禅寺記」

——流布本『正法山六祖伝』『関山慧玄』章・「妙心禅寺記」との対照を通して——

廣 田 宗 玄

はじめに

無相大師・関山慧玄（一二七七—一三六〇）禅師は、正法山妙心寺の開山禅師である。

関山については古来多くの研究が残されているが⁽¹⁾不明な点も多く、現在でもその行状の全てが明確に把握されているとは言い難い。

今回新たに紹介する『禅林諸祖伝』（以下『諸祖伝』）所収、「開山行実記」（以下「行実記」）・「妙心禅寺記」（以下「妙心寺記」）は、関山伝の嚆矢である『正法山六祖伝』（以下「六祖伝」）「関山慧玄」章・「妙心寺記」の草本とされ、古来注目されていたものである。

本論では、まず関山伝の問題点を整理した後、『諸祖伝』について検討を加える。更に『諸祖伝』所収「行実記」「妙心寺記」の全文を活字化し、その問題となる箇所については逐一注釈を加え、更に寛永十七年版『六祖伝』（流布本）との比較対照を行なうことによって、その相違点を明確にしたい。

関山伝の諸本について

現在の学説に拠って関山の伝をまとめれば以下の通りとなる。

関山は諱を慧玄といい、関山というのは号である。信濃高梨氏の末裔で、建治三年に生まれたとされる。建長寺で得度の後、大徳寺の宗峰妙超（大燈国師・二八二—三三七）に参じ、嘉暦四年（一二三九）、雲門の「関」字によって大悟して宗峰に嗣法する。美濃伊深での聖胎長養の後、建武四年（一二三七）、宗峰の遷化に伴い、花園上皇の請に応じて京都へ戻り、妙心寺の開山となる。延文五年（一二六〇）、十二月十二日示寂。世寿八十四。

前述した通り、関山伝については未だ不明な点が多く、その内、最も重要な問題点は関山の生年の問題である。

現在の学説では、前述した通り建治三年に生まれ、延文五年に寂したとされている。これは『六祖伝』に拠るものであり、関山が延文五年に八十四歳で寂したのであるから、それから逆算して建治三年に生まれたとするものである。一体、『六祖伝』は、本書を編んだ東陽英朝（一二二八—一五〇四）の跋文によれば、東陽の師である妙心寺第六祖雪江宗深（一二〇八—一四八六）が撰した『行実記』『妙心寺記』の稿本の潤文校正を、文明十年（一二七八）に東陽に委嘱したことに始まる。雪江は更にこれらに加え、二祖授翁宗弼（一二九六—一三八〇）・三祖無因宗因（一二三六—一四一〇）・四祖日峰宗舜（一二三六—一四四八）・五祖義天玄詔（一二九三—一四六二）までの四世の伝も編述する意図があったようであるが、果さずに示寂する。そして東陽は、法兄である特芳禅傑（一二四九—一五〇六）に勧められ、雪江の意を嗣いで雪江が果たせなかった四世の伝と雪江の伝を記し、上記した『行実記』と『妙心寺記』とをあわせて一著として、明応五年（一二九六）に脱稿する。やがてこの写本は、一五〇年後の寛永十七年（一六四〇）に、妙心寺の行者能僊によって正式に『六祖伝』として刊行されるのである。

『六祖伝』は、関山章の跋文によれば、雪江が諸老宿より、あるいは茶話の折、あるいは散歩の折などに耳に入れた事実をまとめたものであつて、それ自体すでに伝聞によるものである。しかし時代的に言つても関山伝について研究する場合の基本史料であると言えよう。

しかし古来関山の生年説にはもう一説あり、それが駿州蒲原龍雲寺の応禅普善（一六七三—一七四三）による『関山国師別伝』（以下『別伝』）の主張する、永仁五年（一二九七）説である。『別伝』は、簡潔に過ぎる『六祖伝』の記述を補足するものとして珍重されてきた。しかし一方でその内容には古来疑問が持たれており、草山祖芳（一二三—一八〇六）『樹下散稿』（以下『散稿』）に収める『別伝』の末尾に付される識語によれば、

関山国師別伝……芳按件々所記不知^ル何^ノ古記、全不^セ載^セ出^ヲ掘^ニ、古^ニ云、言^シ不^レ涉^ニ典^ニ章^ニ、非^ズ君^ノ子^ノ所^ニ談^ニ。若^シ不^レ涉^ニ典^ニ章^ニ、則^チ総^ニ是^ニ無^ニ稽^ニ之^ニ言^ニ、不^レ足^レ取^ル。雖^レ然^ニ正^ニ法^ニ山^ニ六^ニ祖^ニ伝^ニ等^ニ不^レ載^ニ之^ニ事^ニ、皆^ニ未^ニ聞^ニ之^ニ談^ニ。是^ニ故^ニ写^ニ留^ニ之^ニ云^ニ。

祖芳識（荻須純道『日本中世禅宗史』・p.367）

とあつて、『別伝』に載る説の典拠が全く不明であることから、典拠の不明なる説は君子の語るものではないと批判する。しかし一方でその異説の存在については評価をし、たとえ典拠が無くとも、このような説があることの記録だけはしておくとするのである。

この草山の言葉にも見える通り、『別伝』は特に関山の生涯の初期について他の史料とは全く異なる説を多く載せ、またその内容も多分に劇的である。しかも『六祖伝』と『別伝』の内容は、対校によつては比較出来ない程に異なる。従つて、近年の学者も、その異説に対しては慎重な態度を取りながらも、結局多く『別伝』に依ることになっている。

関山の生年説に關する問題点

このように、関山の生年説には建治三年と永仁五年の二説があり、前者が『六祖伝』、後者が『別伝』に拠るものである。しかし後者の説も、元来は『六祖伝』の記述から類推したものであるとされる。

『六祖伝』には、関山が出家した後、宗峰への参禅の契機となった大覚禪師（蘭溪道隆・一二二三—一二七八）五十回忌の時期を、

年垂三十適值建長開山忌

とし、関山が三十歳の時であったことを記す。もし関山の生年が建治三年であったのなら、大覚禪師五十回忌が行われた時、関山は五十一歳となり、「年垂三十」という記述と齟齬が生じることとなる。また「年垂三十」を重視し、建治三年に合わせて解釈しようとするれば、関山の三十歳は徳治元年（一二三〇）となり、この時、未だ関山の師である宗峰は、南浦紹明（大応国師・一二三五—一二三〇）について修行中の身であり、また蘭溪道隆示寂年も弘安元年（一二七八）であるから、五十回忌とは大きく異なることとなる。

一方『別伝』の永仁五年説に従えば、この時、関山は三十一歳となり、「年垂三十」という記述とはほぼ一致することとなる。では『別伝』説に従えば良いかといえ、先の草山の批判にも見える通り、根拠が曖昧で心許ない。

この問題は古来様々に解釈され、関山伝の最大の問題とされている。

『散稿』によれば、当該問題点について、大徳寺の覚印義諦による『天沢東胤録』から引用して以下の通りに記し

ている。

天沢東胤録（大徳寛印和尚撰）、関山禅師伝系曰、大燈生^ニ于弘安五年^ニ、及^ニ二十三歳^ニ、始往^ニ鎌倉^ニ、見^ニ大応^ニ、二十
六^ニ、受^ニ其印可^ニ、辞回住^ニ静京東雲居^ニ者二十年、四十五^ニ、出^ニ世紫野大徳寺^ニ、五十六歳^ニ、入滅^ス。関山和尚生^ニ于建
治三年^ニ、長^ニ大燈^ニ者六歳、北朝廷文五年入滅、寿八十四也。然^{レバ}、則関山来^ニ参^{スル}紫野^ニ、時在^ニ大燈出世之後^ニ。関山既
五十余歳矣。世曰^ニ年垂^ニ三十一^ニ始謁^ニ大徳相見^ニ国師^ニ者非也（荻須純道『日本中世禅宗史』p.386）。

つまり、宗峰の生年は弘安五年（一二八二）であり、関山の生年は建治三年であるから、関山は宗峰の六歳（正確には五歳）年長となる。また宗峰の大徳寺への入寺は嘉暦元年（一三三六）、四十五歳の時であり、翌嘉暦二年に関山は宗峰に相見したのであるから、その時点で関山は五十余歳（正確には五十一歳）となる。従って、関山が三十歳の頃に大徳寺で宗峰と相見したということは誤りであるとして、『六祖伝』の「年垂三十」という記述自体を誤りであるとするのである。

では現存する『六祖伝』諸本の当該箇所の記述はどうなっているかといえば、全て「年垂三十」となっていて、「五十」となっているものは無い。しかし、此山玄淵（一七二一—一七八三）による『再版正法山六祖伝』⁽²⁾では、当該箇所を「年踰五十」と改めている。その凡例によれば、寛永版（流布本）以前の謄写本数冊を閲し、その古写本に拠って改めたところ。草山祖芳による『正法山六祖伝考』（以下『別考』）もその一つである。

『別考』では、『六祖伝』諸本の関係について次のように述べる。（原文句読点無し）

此六祖ノ伝、今ノ板行ハ本山ノ行者能僊ガ寛永十七年印刻スル也。行者能僊ハ元祖能伝、南化国師ノ弟子ナリ。

二代能鍊、三代能僊也。此ノ印本所々不宜所有リ。此印刻已前、慶長五年庚子ノ古写本、今現ニ花園大雄院所藏ナリ。此ノ写本宜所多シ。

つまり、行者能僊が印刻した寛永版は誤りが多く宜しからざる所がある。一方寛永版以前の古写本、つまり慶長五年（二六〇〇）の写本の『六祖伝』が妙心寺塔頭の大雄院に所蔵されているが、これは信頼出来るものであると述べているのである。古写本との比較については草山はその『別考』の中で諸所に行っており、当該箇所もその一つである。

また『別考』では、問題となる当該箇所について次のように記している。（原文句読点無し）

此印本在三十三_ト不宜_カ、慶長五庚子之古写本作五十一_ニ為_レ是。関山祖在_リ鎌倉_ニ凡三十年也、始参_{ズル}大燈_ニ五十一歳也、随_ニ侍大燈_ニ四年也、関山祖勝_ル大燈_ニ五歳也。雪江和尚関山伝_ト与_ニ妙心寺記_ニ編_{シテ}東陽和尚工潤文ヲ被仰付ナリ。有_ニ禪林諸祖伝_ニ云書_ハ、甚珍_{ナリ}。其諸祖伝中_ニ雪江和尚ノ草本ノママノ関山伝ト妙心寺記トヲ載ス。文ハ不花ナレドモ実録ナレバ甚可也。水戸黄門公所藏有_ニ此書_ニ。曾華園長興院有_ニ一人僧_ハ、後宗改_テ巖門_ニ為_ニ隱元_ノ侍者_ト。隱元有_ニ二侍者_ハ、一人謂_ヒ唯了_ト、一人謂_フ唯龍_ト。其唯了即長興院之僧_ニ而改_テ宗_ニ、示後還俗_{シテ}為_ニ水戸公儒官_ト。謂_フ佐々助三郎_ト、為_ニ花園盛徳院象泉和尚与_ニ助三郎_ト旧識_ト。故象泉和尚依_レ之往_ニ常州_ニ関_ニ水戸公藏書_ニ。即諸祖伝_モ藏書中_ニ。其ノ伝中三十之三字作_ル五_ニ。然五十_ハ写誤也_{ナリ}。此ノ印本往々誤多_シ矣。天沢東胤録（大徳派下泉州堺禅楽寺二世徳禅覚印義諸編集）参_ニ見大燈_ニ時五十歳也（取意）。

つまり、寛永版の当該箇所が「三十三」となっていることは甚だ宜しく無い。事実、慶長五年の写本には「五十一」と

なっている。故に関山が鎌倉に在ったのは三十年間であり、宗峰に参じた時は五十一歳であつて、関山が宗峰に随侍したのは四年間であつたのである。また雪江和尚は自らが著した関山伝と妙心寺記の潤文校正を東陽和尚に任せた。『禅林諸祖伝』なる書が有り、これは甚だ珍書である。その書中に雪江和尚の草本のままの関山伝と妙心寺記とが収録されている。この文自体はあまり宜しくは無いが、雪江和尚の実録であるので、その点は宜しい。これは水戸黄門、つまり徳川光圀（一六二八—一七〇一）公の蔵書の中に含まれているものである。かつて妙心寺塔頭の長興院に一人の僧がおり、彼は後に黄檗宗に転じて隠元禅師の侍者となつた。隠元には二人の侍者がいた。一人は唯了、もう一人は唯龍といった。その唯了こそが先に挙げた長興院の一僧である。その後、彼は還俗して水戸公の儒官となり佐々助三郎と名乗つた。助三郎は妙心寺塔頭の盛徳院の象泉和尚（象先師点、正元師蠻の弟子）と旧知の仲であつた。だから、象先和尚は助三郎を頼つて水戸公の蔵書を閲覧する機会を得たのである。そして、その『禅林諸祖伝』の当該箇所もまた、「三十」の「三」が「五」となつていたのである。つまり、これは「五十」の写し誤りである。このように寛永版の印本は誤りが甚だ多い。『天沢東風録』にも宗峰への相見を五十としてゐるのではないかと述べているのである。

佐々助三郎は、正しくは佐々介三郎宗淳（一六四〇—一六九八）^{むねきよ}と言ひ、介三郎は通称、宗淳は諱で、字は子朴、十竹（齋）と号した。寛永十七年五月五日に瀬戸内海の一小島に、佐々直尚の第五子として生れる。承応三年（一六五四）、宗淳十五歳の時、妙心寺に入つて「祖淳」と号して禅の修行に励む。しかし万治三年（一六六〇）、二十一歳の時、当時摂津普門寺に在つた隠元隆琦（一五九二—一六七三）の下へ参ずることになる。その後、諸宗の宗旨を学んだ後、再び妙心寺に戻る。

妙心寺に在つた時の祖淳は親しく正元師蠻（一六二六—一七一〇）と交流を持つ。祖淳の筆記録である『松蘿本十竹斎筆記』に、「志蜜字万祚……曾て延宝伝燈録三十巻を撰し、又日本高僧伝を撰す。……宗淳少しく文字を識るは、

皆万祚師の力なり。其の恩莫大なり」(原漢文)と自らが述懐していることからそのことは窺えよう。

祖淳はその後、当時の仏教界に不満を持ったことから儒教に傾倒するようになり、延宝元年(一六七三)、三十四歳の頃、還俗する。因みにこの後、名を宗淳と改め、字を子朴とし、介三郎と称するようになったようである。

やがて延宝二年九月、『大日本史』の編纂に当たっていた徳川光圀の目にとまり、水戸藩に仕官することになる。水戸藩に仕官した後の宗淳は、主に史料収集に努め、元禄元年(二六八八)七月には彰考館の総裁に任ぜられ、紀伝編纂に励む。元禄十一年六月三日に没す。

水戸藩に仕官した後も宗淳は師蠻と親交を保ち、光圀が藩内の清音寺の住持に師蠻を拝請せんと望んだ時も、宗淳がその仲介の任に当たっている。結果的に師蠻の清音寺住持の期間は約一年程ではあったものの、その後も宗淳と師蠻は、主に史料の提供について協力しあっている。象先と宗淳との親交については明確では無いが、師蠻との関係の深さから考えても、両者に親交があったことは容易に推測出来る。⁽³⁾このように草山の記述はほぼ正鵠を得ていることが理解出来る。

さて、ここで問題となるのは『禪林諸祖伝』なる書である。『別考』の記述の通り、雪江の草本が録されているのであれば、関山伝の最古のものであり、関山伝の底本となったものと言うことが出来よう。以下、本書について検討を加えたい。

『禪林諸祖伝』について

この『禪林諸祖伝』については古来詳細が不明であったが、駒沢大学図書館編『新纂禅籍目録』(p.266a)中に、「十六冊、写(松雲公代)、金沢天徳院、岸沢(異本)」とあって、その所蔵場所が記されている。

現在、曹洞宗文化財調査委員会（主事・松田陽志氏）では、末寺所蔵の資料の一切を調査整理中であり、この天徳院も既に一昨年調査済みであった。筆者は今回この天徳院蔵『禅林諸祖伝』の複写を駒沢大学にて閲覧する機会を得た。『禅籍目録』の記述通り、全十六冊、目録一冊（巻物形式のようである）。目録を収めた紙袋の表書きには次のように記されている。（原文句読点無し）

禅林諸祖伝目録一冊。養民堂主人（加賀藩五代松雲公）直筆也。古より当山秘菰書として伝ふるも松雲公の直筆として世上発表するの機無し

昭和十三年八月二日松雲公の書たることを発表す 廿八世代 記す」

つまり、本書は加賀藩五代藩主前田綱紀公直筆のものであり、古來秘蔵の書として所蔵されてきたが、昭和十三年に至り、正式に発表するとしている。

前田綱紀公は、寛永二十年（一六四三）十一月十六日に生れ、享保九年（一七二四）五月九日に没する。加賀藩の五代藩主であり、父は第四代藩主、前田光高公、母は水戸徳川家、徳川頼房（一六〇三—一六六一、徳川家康の十一男、水戸徳川家の祖。嫡男は徳川光圀の娘（後の徳川三代將軍家光の養女）、大姫である。つまり綱紀にとって、徳川家光は義祖父、徳川光圀は伯父ということになる。

綱紀は、父光高早世により、わずか三歳で藩主となる。そして、祖父前田利常、次いで保科正之の後見の下、藩政改革に尽力する。

綱紀は、その藩政の手腕を高く評価され、名君の誉高く、また一方で学問にも非常に造詣が深く、蔵書も膨大であったといい、著述書も一二部に達した。学問においては伯父徳川光圀とも関係が深く、書物の貸借なども行われて

いたと言う。

また目録の末尾に次のような記述も見える。(原文句読点無し)

右、禪林諸祖伝(此の号は『歷朝陵考』に見ゆ。今、検閲する所の本は、出雲寺の坊本なり。先年、之を秘文府に求め得たる者なり。坊本は題して『祖師伝』と曰い、又た『諸祖伝』と曰うも、姑く『陵考』に従うと云う。十二冊。一見の次り、分けて一十六冊と為す。時に宝永七年歳の次、庚寅初秋初四日。養民堂主人誌(右禪林諸祖伝(此号見歷朝陵考。今所検閲之本者出雲寺坊本。先年求得之秘文府者也。坊本題曰祖師伝、又曰、諸祖伝。姑從陵考云。一十二冊一見之次、分爲一十六冊。時宝永七年歳次、庚寅初秋初四日。養民堂主人誌)。

つまり、本書名は『歷朝陵考』⁽⁴⁾に見えるものである。今調べているものは、版元出雲寺の坊本であり、先頃貴重書の蔵より見つけ出したものである。それは『祖師伝』もしくは『諸祖伝』とも言ったが、『陵考』に従って『禪林諸祖伝』とした。もと十二冊本であつたものを分けて十六冊とした。時に宝永七年(一七一〇)七月四日に綱紀が記すとしている。

先に見たように、草山は本書について、徳川光圀所蔵のものを覽たと述べている。しかし、綱紀の記す所では、出雲寺の坊本というのみであつて、光圀所蔵のものかどうか判然としない。綱紀が本書を見つけた場所を「秘文府」としていることから、貴重書として扱われていたとも思われる。ではその「秘文府」の指す場所であるが、これもわからない。あるいは前田家と徳川家は関係が深く、綱紀と光圀との関係の密接であつたこと、宝永七年は光圀没して九年後であることから、光圀の蔵書から本書が綱紀に渡った可能性もあるが詳細は不明である。⁽⁵⁾

また『新纂禅籍目録』には、当院所蔵本のほかに岸沢文庫に異本のあることを指摘している。筆者は岸沢文庫を所

蔵する静岡県沼津市の曹洞宗・旭伝院に確認を取ったが、住職交代の直後で詳細はわかりかねるが、今の所、『禪林諸祖伝』なる書は見当たらない、との返答を受けた。あるいはその岸沢文庫本が草山が覽たという『諸祖伝』である可能性もあるが未詳である。

諸々問題も残るが、取りあえず本書に見える「行実記」「妙心寺記」の全文を挙げ、寛永版の『六祖伝』流布本との対照を試みたい。

○『禪林諸祖伝』巻十五所収、「開山行実記」・「妙心禪寺記」

一、以下は『禪林諸祖伝』所収、「開山行実記」・「妙心禪寺記」と、寛永十七年版『六祖伝』『関山』章・「妙心禪寺記」である。

一、現存する『六祖伝』には、概ね、①永正七年『宗門正燈録』巻十三所収本（写本、妙心寺聖沢院蔵）、②寛永三年版『宗門正燈録』巻十三所収本（禅文化研究所等蔵）、③寛永十七年版『正法山六祖伝』（流布本、荻須純道『正法山六祖伝訓注』〔思文閣出版・一九七九年〕に影写あり）の三部がある。詳細は、加藤正俊「関山慧玄伝の史料批判」（『日本仏教史論集・第七巻・栄西禪師と臨済宗』吉川弘文堂、一九八五年、p.221-269）等参照のこと。なお、今回は対校に③を使用する。

一、流布本『六祖伝』『関山』章・「妙心禪寺記」との相違を明確にするために、上段に『諸祖伝』、下段に『六祖伝』を挙げる。

一、対応しないものは「ナシ」と表記する。

一、「六祖伝」の番号は、荻須純道『正法山六祖伝訓注』に従う。

一、「六祖伝」『諸祖伝』共に原文には句読点はないが、便宜上句読点を付ける。

一、徳川光圀所蔵『諸祖伝』と本書との異同を検討するために、『別考』の記述に従って、相違箇所傍線を引いて対校を加える。なお『別考』中の「古写本」というのは、慶長五年の写本を含む寛永版以前のもののことであり、『諸祖伝』とは異なるが、参考のためにそれも対校に使用する。

一、「別考」に指摘は無いものの、流布本との明確な相違、並びに問題となる点については波線を引いて検討を加える。

一、原文の字体に混乱が見られるので、基本的に新字体を用いるが、原文のまま残したものもある。明らかな誤字は改めた。

【諸祖伝】

①妙心禪寺開山禪源大濟禪師行状(a)

師諱慧眼、信州人也。姓源氏、清和天皇十五代孫、高梨之族也(b)。幼而穎利。父携往相陽到建長、拝広嚴和尚而難染矣。稍及長雖識宗門有仏祖大事因縁、無由參尋。 歲垂三十(一) 恰值福山開山祖師忌。

【六祖伝】

①妙心関山玄禪師

師諱慧玄、嗣大燈国師。信州人。俗姓源氏、高梨高家之孫也。幼而穎利。父携往相陽登巨福山、拝広嚴和尚難染。稍長識宗門有仏祖大事因縁、而未有啓發者。年垂三十(一) 適值建長開山忌。

(一)『別考』「其伝中三十之三字作五」

↓『諸祖伝』「歳垂三十」

↓『流布本』「年垂三十」

(a) 妙心禪寺開山禪源大濟禪師行狀「妙心寺第四世日峰宗舜の諡号。妙心寺の中興開山としてこの号が与えられたのは、

日峰二十五回忌を迎えた文明三年（一四七一）のこと。

(b) 清和天皇十五代孫、高梨之孫、高梨之族也「関山を「清和天皇十五代孫」とするのは、此山玄淵『正法山六祖伝考
纂』に載る高梨家系譜と一致する。『流布本』では、より明確に「高梨高家之孫」とする。

②聞宿忌鐘整威儀、而登西來祖塔、与大衆同諷楞嚴呪、而行道到第五会。行者打鈴下、与象齋散。立班之次、師謂同輩曰、今海内叢林何人行活手段之惡辣大宗匠乎。同輩乃告云、頃聞洛陽城外有大德禪刹。某長老者具惡辣手段、而殺人不貶眼底大宗匠也。衲子雲臻故亦有王僕敬重也。自天子特賜興禪大燈国師之号焉。師曰、所謂惡辣手段者、其故如何。同輩云、人伝、近日有一僧、往大德寺而望相看。侍者報之国師。便出其僧展坐具禮拜時、自袖中落一柄刀。其刃如水雪也。国師怒令侍者引出曰、這僧大凶党也。合敵仏法。付直歳於三門前速可殺矣。直歳即如国師慈誨也。不是惡辣手段乎。

③師聽之忻然曰、是我平生所庶之善知識也。宿忌未畢、自西來祖塔徑出建長門、直趣京城。

②聞宿忌鐘整威儀、赴西來院諷經。掇位立班、師謂同列曰、方今海内叢林誰為活手段宗師乎。或者曰、我聞洛之大燈国師具惡辣手段。殺人不貶眼底和尚也。師問、其如何。曰、相伝、近日有一僧相看。展拜次一柄利刀自袖中落。其刃如水雪。国師怒曰、侍者拈出這凶党付与直歳、於三門外速令棒殺。他後當為仏法敵。直歳即如慈旨矣。豈非惡辣宗師哉。

③師聞焉忻然而曰、是我真善知識也。宿忌未終、自西來塔下徑赴京師。過湘涉江、露眠草宿、遂到雒陽城。

④經數日到大德寺、登衣鉢閣白云、新到相看。侍者即報
 国師。即出師便問、如何是衲僧本分事。国師曰、如雲門
 関字、汝如何透過(一)。師便礼拝(三)。国師云、作家
 禪客、天然有在(四)。師払袖便出。

⑤至翌日望掛搭。国師令侍者道、須持介来掛搭。師云、
 夫善知識者具金剛正眼。一見便見、上座心肝五臟了。更
 說甚持介来。国師門之便容掛搭。

(一)『別考』「此ノ処ニ有_二東陽和尚ノ潤文_一。禪林諸祖伝、
 違_二今文_一、作_二如何是衲僧本分事_一。国師云、雲門ノ関字、你、如何
 透過_{スル}」

↓『諸祖伝』「如何是衲僧本分事。国師曰、如雲門関字、汝如何透過」

↓『流布本』「宗門向上事」

(二)『別考』「禪林諸祖伝、作_二師則礼拝_一」

↓『諸祖伝』「師便礼拝」

↓『流布本』「師払袖便出」

(四)『別考』「古写本、有在トアリ」

↓『諸祖伝』「有在」

↓『流布本』「自在」

⑥從是晨鍛夕鍊、竟透徹関字。一夕上丈室呈其見解。国
 師拊手称善曰、直饒雖仏祖、莫越汝今大機大用也。亦云、
 汝最初与老僧相看、夢雲門大師来也。是故前頭示以関字。

④直上大德寺衣鉢閣、勵声稟曰、新到相看。侍者便報国
 師。即出師纔礼拝乃問、如何是宗門向上事(一)。国師
 曰、関。師払袖便出(三)。国師曰、作家禪客、天然自
 在(四)。

⑤翌日師望掛搭。国師教侍者道、若要掛搭、先須持紹介
 来。師曰、夫善知識者具金剛正眼。才跨門限、一見便見、
 見徹上座心肝了。更說甚麼紹介麼。国師笑而許參堂

⑥師一夕忽然会得雲門関字、急上方丈呈見解。国師拊手
 曰、爾再来人也。爾初与老僧相看前夜、夢雲門大師来。
 因是示以関字。爾今透徹速如此。也宜号関山。旧諱慧眼、

汝今速透也。定知再来人矣。宜字汝号関山、諱雖慧眼、以語脈故改眼為玄字。国師仍作関山号頒付与之、又示証明法語。其略云、將從前大悟大徹底、宜覆蔭后昆者也。不為必長養聖胎而已。經數日、忽辭国師而往濃陽之深山、住庵及經六年(c)。

(c) 往濃陽之深山住庵及經六年＝関山の濃陽隱遁の期間を「六年」と明記するのは『諸祖伝』のみ。

⑦国師示微恙、于時萩原大上法皇居花園離宮。一日遣勅使(五)往大德寺、白国師云、和尚百年后、嗣法高弟中、向何人商量這事耶。国師答勅宣曰、吾嗣法諸師雖多、其中有慧玄藏主者、実得吾道髓也。須就彼庵所、遣勅使召出而尋問矣。上皇遂如国師遺命也。上皇方其捨離宮欲為寺、乃白国師需山号寺号。国師即応睿旨、山名正法寺妙心。蓋以擬梵王献花之故事也。

(五)「別考」「古写本、勸修寺当ノ中将トアリ。是為正」

↓「諸祖伝」「勅使」

今改眼作玄則可。仍作頌而証之。自此侍奉貌右及尽玄微。⑧国師一日付法語。其略曰、苟有人則於壁立万仞処輕輕推將去、到不回頭時節、直与惡辣手脚、全体作用。不必長養聖胎、專有意憂於后昆者也。豈元德二稔仲夏上潒也。既而師辞去、入濃陽深山、盤結草庵而居。

⑨後数年、国師示微恙。萩原太上法皇大驚睿聞、勅黄門侍郎藤藤房(五)趨謁宜問。黄門(六)詣雲門丈室、具陳聖旨曰、和尚嗣法諸師中、誰是最得大機大用者。願承指教、百年後猶要扣玄奧。国師対曰、我付法諸子中、唯慧玄藏主実得吾道髓。然天生風顛漢居無定所。他時異日、宜降宣詔而徵求。黄門還奏聞。上重遣甘露寺亞相藤氏宜論曰、朕將捨華園離宮以成禪苑。当請関山令住持。願預賜山号寺号。国師便応聖旨、進正法山妙心禪寺之号。蓋用拈華微笑因緣、而配上皇於梵王、擬華園於一枝、称関山為迦葉師兄者也。

(十六)

↓『流布本』「黄門侍郎藤藤房」
↓『別考』「古写本、作中将可也」
↓『諸祖伝』「ナシ」
↓『流布本』「黄門」

⑧果国師入滅。後捨花園宮室而為禪刹。請師為開山祖。

⑩無幾国師示寂。睿襟哀痛不已。乃依遺命下詔四方令尋師。師猶在濃之山中、人未之知。天使偶然到其邑、聞有住庵僧、且問風度。窃謂、必其人也。造則果然。因具陳宣旨、師未肯起。天使曰、国師既戢化。陛下失南針於霧海。今何時而欲高枕安眠乎。何況国師遺命在師一人、大法重寄屬師一肩。第趣命駕萬幸。師於是慨然而作曰、公之言然也。吾行矣。輒俶裝赴京。

⑪直調華園離宮。皇情大悅、先令中使謝遠來。且約曰、朕將捨離宮為伽藍。當請和尚作開山始祖。但願聽許。師對曰、貧道雖不敏、既庇宣詔得得而來、唯命也耳。天顏大喜、於是草創正法山妙心禪寺。特降勅黃請師開山。即日入寺開堂。師端居丈室、接納四來。不專威儀札樂、唯棒喝交馳而已。

⑨上皇亦山中建玉鳳院而居之、旦夕問道、竟造其深奧也。

⑫上皇亦於方丈後別創一院、以潜居。扁曰玉鳳院「先是

⑩師の子授翁弼和尚、其時未為僧。承勅命往大德寺、聞得髓一句之人也。還奏上皇而后、雞髮成僧、然後嗣師道。住山者唯此弼上人一人也。邇來弼和尚座下、龍蟠鳳逸衲子、頗多之焉。

⑪師天然具作家手段、胸次豁如也。專來学応接、嫌世縁粘著矣。在世之際、更無昼誦夜禪、晨香夕燈之矩規也。又無嚴飾梵苑莊簾、破堂之用心一味、但將向上巴鼻、施設四海禪流而已。昔日丈室上大破、每雨下屋漏(七)無座所。師一日命二童子、持小器來令当其漏處。一童起將縛桶(八)当之。師罵之曰、這瞞漢出去。又一童子持篋籬來当之。師即稱賞之。又一日賓客來時、点待了後令燒

移皇居於萩原別殿」。旦夕請益、增造仏祖間奥矣。機縁語句見于本録。甘露寺重相、蚤參見国師、頗有省處。国師滅後、復扣師室、忽感痾恙。師躬往看問曰、公病重、有苦惱也無。公曰、我即今入大光明藏三昧、与和尚相見了。更有甚什苦惱麼。師曰、無苦惱時如何。公喝一喝、便逝矣。師抗声曰、將謂俗漢元來作家。弘袖出去。

ナシ

⑬師丈室甚弊漏。每雨無坐所。一日乍雨。師召持器來当漏處。一童子急將篋籬來。師太称賞。一童子索篋桶來(八)。師罵曰、這顛頂。打趣出。信州高梨氏某、以忝譜系故入山拜謁。視丈室漏、退裏侍者曰、上方屋漏、胡為不修葺耶。些些費用願致奉加。侍者白師。師大罵曰、這俗漢、將謂相看管慧玄屋(七)為甚什麼。向後勿復來。一日有客、為置茶筵。筵罷令燒浴。浴主白、無柴。師曰、

浴。々主白、無薪。師曰、無薪、須破櫬板(九)焼之。
住山号令触事豁達、皆類焉。

無柴、当毀櫬板(九)而焼。或時春雨昼靜。衆寮寂無僧
声。師問、何故。或白、普請摘茶。師曰、奈何湿却清衆。
急須伐將茶樹來令於內摘。或時見僧來參呵斥。僧曰、某
特為生死事大無常迅速而來。師罵曰、慧玄(会裏無生死。
便打趂出。大凡住山号令、触事如此。龍宝国師在世時、
称旧參者十六人、国師遷化後、相率歸師席下。我侍者其
首也。我遭打出凡二十五度、後嗣授翁「雲山和尚是也」。

(七)

『別考』「古写本ニ屋ノ下ニ漏ノ字アリ、ヨイナリ」

↓『諸祖伝』「屋漏」

↓『流布本』「屋」

(八)

『別考』「古写本ニ来字ノ上、持ノ字アリ、索箍桶將來ト在リ。雪江和尚草本ニハ縛桶ヲ持來トアリ」

↓『諸祖伝』「將縛桶」

↓『流布本』「索箍桶來」

(九)

『別考』「古写本、作櫬板ヨシ」

↓『諸祖伝』「櫬板」

↓『流布本』「櫬板」

⑫ 師法属裡 殊興池寺白翁和尚甚好。毎通酬酢音問耳。

ナシ

(d) 師法属裡、殊興池寺白翁和尚甚好。毎通酬酢音問耳。『興池寺白翁和尚』は、宗峰の法嗣である白翁宗雲(生没年不詳)のこと。白翁は出雲の人、俗姓は源氏。大徳寺、徹翁義亨(一二九五—一三六九)の族弟とされる。近江に天地

山積翠寺を開いて住す。大徳寺第二世。但し、この白雲と関山が特別に親しかったという記述は他に見えない。『延宝伝灯録』卷二十一・『本朝高僧伝』卷三十三・『紫巖譜略』・「大徳寺世譜」に伝あり。

⑬師一日使侍者喚来宗弼上人謂曰、諸方尊宿臨遷化間作遺偈。或有坐亡者、或有臥死者。吾這裡一々不要之。微咲塔前有風水泉、々々上有大樹。師束装而頂笠以背靠樹(二〇)、与弼上人談論出世本末了、泊然立化去。弼上人即告一衆、昇入丈室而後、埋金身於本山東辺。今微笑塔是也。世寿八十三(e)、法臘六十四也。第六世拙孫比丘宗深焚香九拜謹狀

(二〇)『別考』「雪江和尚草本ニハ靠ノ字アリ、ヨシ」

↓『諸祖伝』「靠樹」

↓『流布本』「倚大樹下立」

(e) 世寿八十三『流布本』他、諸書みな「八十四」とする。

⑭後醍醐天皇在位時、令国師入内。国師時不安也。命師入内。師与天皇問答教四龍顏大喜。此事詳于国師行

⑭師天然胸次豁達、嫌世縁粘著。在世之際、不拘禪誦規式、無意殿堂莊嚴、道具弗飭、至綰藤以作袈裟環。室無長物、只有兩朝宸奎滿篋爾。不開大鑪鑪、施惡辣鉗鎚。風塵草動、一味弄向上巴鼻。自非上上根機、難惜手脚。嗣師法者唯授翁弼禪師一人焉耳。

⑮師一日束装頂笠、召弼上人来也。相携到風水泉頭、倚大樹下立(二〇)、談出世始末了、泊然化去『風水泉井名。今在妙心庫司前。其樹近年尚存云』。授翁遺告一衆、昇入丈室。奉全身瘞於本山良隅、建塔名微笑庵。世寿八十四(e)、法臘六十四。肯延文〔後光嚴院年号〕五年〔庚子〕十二月十二日也。

⑦後醍醐天皇詔国師入内。于時国師不安、命師而代。上問、不与万法為侶者、是什麼人。師起鞠躬却奏曰、不与

状。々中云、使弟子僧蓋指師也。

万法為侶者、是什麼人。上以手中珪劃一劃曰、這箇聲。師便退身。大称旨「此事載于国師行状曰、一日召弟子僧入内即師也」。

⑫に含む

⑮国師遷化後、花園上皇勅甘露寺大納言降綸言曰、大燈国師平生語録、与法眷校合、可令編者也(f)。開山上人禪室、甘露寺大納言、自国師在也。参禪久矣。国師入滅后、相繼又参師。經年忽違和、遂至困極。師聞即往問之大納言而迂对。師曰、公令入重病間定苦惱可多也否。公一喝云、吾今入大光明藏三昧有甚苦惱。即逝矣。師高声云、作家々々。払袖去。

(f) 大燈国師平生語録、與法眷校合、可令編者也。現存する「大燈語録」は、上巻は侍者性智、中巻は侍者宗貞、下巻は侍者惠眼による編集である。「法眷」とは法兄のこと。

ナシ

⑯師住山之始、花園上皇親染宸翰。寄進諸国莊園之裡、河内守口為最初也。又寄玉鳳院莊田太多。別有奎章一帖、山門甚宝秘之焉。今玉鳳院中、上皇写昭乃上皇所自画也。故為吾山之奇珍矣(g)。

(g) 師住山之始：故為吾山之奇珍矣。河内莊は妙心寺最初の莊園である。康永四年（一三四五）二月、関山宛に出された

院宣に河内の地領を妙心寺に所属せしむる旨が記されている。また玉鳳院の莊園については、康永二年（一三四三）年三月付けで雲山宛に同じく河内国地領下付の院宣が下される。「別奎章一帖」とあるのは、所謂「往年の御宸翰」を指すと思える。

⑬ 国師在世時、称旧参者凡一十六人。国師入滅時、相牽

到師会中而掛錫也。我侍者為其首也。我後号雲山嗣授翁。

賀茂正伝寺開山元庵和尚也。其嗣法弟子富春和尚者元庵

高弟也。師与這和尚甚厚善。富春一日与客語。師行跡云、

於本朝不相応作家也。一日有僧相看問云、如西江吸尽、

和尚如何領略。富春曰、先師不道、吾亦不道。其僧珍重

出去。這僧后来入師室拳前話。師呵云、這者只作得馬祖

下僧、不識衲僧門下。別有条章（h）。

（h）賀茂正伝寺開山：別有条章Ⅱ「賀茂正伝寺開山元庵和尚也」とあるのは、明確な誤りである。「元庵和尚」は、元庵

普寧（一一九七—一二七六）のことであり、「賀茂正伝寺」は、京都市上京区大宮町西賀茂に現存し、現在南禪寺派の寺院である。弘長年間（一二六一—一二六四）に元庵の法嗣、東嶽慧安（一二二五—一二七七）が、当初一条今出川に開き、後に現在地に移されて後醍醐天皇の勅願寺となる。従って元庵の開創ではない。また「富春和尚」については不詳。

⑭ 此件々、悉開門中諸者説。或茶話間、或遊山次、皆不妄談故、拳以載于師行狀後（i）。

⑮ 右件件、儘得之於門中諸老口碑者也。或茶話間、或遊山次、往往染耳銘肝。而今耄矣。十遺八九。無復樂聞者、

⑬ を含む

(i)

此件々：師行状後Ⅱこの記述自体は流布本にも見えるが、その位置と内容に差がある。流布本では開山伝の末尾に見えることから、開山伝全てが伝聞であると取れる。しかし『諸祖伝』では、⑫で「第六世拙孫比丘宗深焚香九拜謹状」とあつて、一旦行状を終えた後、⑬から⑯までの内容を「門中諸者」より茶話の折などに耳にしたと読める。つまり、①から⑫までの記述に関しては伝聞では無く、何か典拠があつたとも取れるのである。では雪江が拠つた資料は何か、現段階では不詳である。

恐夫失墜乎。不免家醜外揚爾。第六世拙孫比丘宗深、焚香九拜謹記。

⑬ 開山頌

超宗峯

ナシ

鎖斷路頭難透處、寒雲長帶翠巒峰。
韶陽一字藏機去、正眼看來隔万重。(i)。

(j)

開山頌 云々Ⅱ宗峰妙超が開山に嘉暦四年（一三二九）仲春（二月）に与えた道号ならびに道号頌に附された讃。大きく「開山」と書した下に宗峰によるこの讃が附されている。国宝。妙心寺藏。

① 西京正法山妙心禪寺記

桓武天皇、自神武五十代之聖君也。初於本州門東西二京、号之曰平安城。然当西京坤方、關籍田地則方八町也。北以限土御門、東限紙屋河、南以限近衛小路、西以限育官小路。其間築宮殿構台閣、莊嚴嚴飭、金碧照耀、堪為天下壯觀矣。每年二月、主上行幸茲地。月郷雲客及千官以

① 正法山妙心禪寺記

原夫日本神武天皇以来、皇都荂遷無有恒所。去神武世五十代、而桓武天皇立。于時巡狩至山城州、相攸於穩多岐郡獲形勝地。遂建都而居。目之曰平安城。城之中央大構宮室者大内也。城東曰東京、城西曰西京。乃今之都也。自桓武逮今上皇帝、歷万万世無復遷革、則蓋以地靈乎。

下尽供奉。仍駐龍馭七日之間、於此殿庭行籍田之儀式。主上躬御農器、且勞三推刀、以先百姓功。其法如札記本伝也。蓋本朝行斯節会年久矣。

(一一) 『別考』「此ノ字ノ下ニ古写本ニ、者字在リ」

↓ 『諸祖伝』「ナシ」

↓ 『流布本』「茲」

② 到延喜御宇、大内回祿之時、北殿亦罹災也。大内再興之日、北殿雖同復旧觀、丙丁童為崇七度、竟燼滅矣。一条院御宇左大臣有人公、承綸言於此地構弟宅。故時人稱

抑又平安之名徵于茲(一一)矣哉。当西京坤隅闢其地、履方八町為界者籍田也。南限近衛坊、北限土御門、東限紙屋河、西限齊宮小路。山連仁和而与龍翔寺相望。有茂林焉、有修竹焉、環以繚垣。寔鬱然雄基也。

② 維昔昇平日、務在祭祀朝無闕典。歲時必有事郊廟、本朝謂之節会。籍田儀其一也。考札記通典等、古祀尚簡。周漢已降、立官舍置令丞。又於書史間顯着矣。爰春王正月元辰、率公卿百官臨幸此地。載將耒耜躬自耕。特勞三推力先百姓功、令其勤國之本也。仍駐龍馭七日、大置酒高会、賜宴群臣。扈從衣冠咸稱萬歲。每載若斯、不也盛哉。後來擬行在所、置宮殿治苑囿、既備莊麗之美。自此都人首稱華園離宮。当知、昨之籍田即今之華園是也。

③ 醍醐天皇「人王六十代」延喜年中、大内有鬱攸災。御園罹之。無何宮之与園還旧觀乎一時。慶及社稷、不也大哉。自邇而來、星移霜換、丙丁崇園者七度、興廢猶如反

之花園左大臣。其弟也朱薨粉壁、照映西京。加之山以築而峯嶽、池以鑿而浩渺。寔寰中勝概也。惜哉、無馬為崇復及而回也。公之孫某、丕承先緒、權勢無双。遂再興而如始也。到元亨天皇之御宇、左府之孫拳族皆移住于賀茂之北、喚其地亦号花園、而旧宅之花園寂寞矣。

(一一) 『別考』「古写本、作「于一」条院「不可也」

↓ 『諸祖伝』「ナシ」

↓ 『流布本』「白河院」

③ 文保天皇登祚時、專瞻仰大德開山祖師之法道、而參禪已十余年、特賜興禪大燈国師号。天皇在位十年後、禪位于後醍醐天皇、遷為仙洞三年也。曾遣一宮人(一一三)、先移花園旧宅而居、而後上皇退仙洞、亦潜居于此。是故万人仰称花園御所。且後來以文保天皇奉号花園院、蓋本

掌。嗟、夫天乎人歟、不可以測焉。白河院(一二)御宇「六十六代」有詔賜園左大臣有仁公。公就籍田官舍傍增開池館以燕居。時人呼為華園左大臣。其築山也、有嘉樹名華之可以娛心、其瀦水也、有異禽怪石之可以驚俗。且雕闔繡甍耀映西京。堪称天下莊觀焉。

④ 中年事俄發、左府第宅、一再厄兵燹。園宇蕪沒者年旧矣。左府雲孫某人、丕承先緒、專握朝權。復得修旧業、而憩於甘棠。然後拳族移家鴨川北。其地以其人故、亦名之華園。因是西有華園、北有花園然焉。在北麓者私第也。在西京者御園也。不可同日而語之。

⑤ 恭惟、人皇第九十四代有聖明主而登祚。改元延慶、大開皇極、在位十年、禪位居於仙洞又三年、於是上尊号、奉称花園院何也。蓋上皇在位間、用万機余力傾心乎祖道。專瞻仰大德開山宗風、參禪無虛日。特賜興禪大燈国師号、以旌崇敬之誠矣。然雖既洞居、猶有意潜蟄。則要且得間、

于此也。後醍醐亦相繼欽仰国師之道、而參禪問答機縁見于本録也。特令国師入内執弟子礼。亦賜高照正燈国師号。

(一三) 【別考】「下、出字上、在古写本、可也」

↓【諸祖伝】「曾遣一宮人」

↓【流布本】「故出一宮人」

④時国師示微疾、已有入般涅槃瑞相。皇帝聞之甚動宸襟。花園上皇殊又大驚睿慮。上皇故遣一簪纓之族往大德寺、問国師曰、和尚百年後、嗣法諸師雖甚多、其中向誰人尚商略仏祖大事、願垂開示。国師即答睿問曰、吾嗣法諸子雖多、其間有慧玄藏主、實得吾道髓也。此玄藏主天性風顛漢而居処(一四)不定。請下詔問之。使者還奏。即日詔下尋問四方。玄藏主此時住庵于濃陽深山中。天使往伸睿旨云、国師今將戢化。和尚速起。合來花園離宮而居、願猶未了公案問而亦有国師遺命也。和尚即領詔命而上京。

擬欲以參究宗門大事也。故出一宮人(一三)去、令於花園望幸。仍一日微行、竟以駐蹕矣。由是天下人指離宮、称花園御所、亦称上皇奉号花園院太上法皇。皆本于此者也。嗣皇即後醍醐天皇相繼、亦欽国師道。頗有參詳機縁、見于国師語録。曾詔国師入内、親執弟子礼。復加与高照正燈国師号。

⑥建武二年冬十二月、国師不安。上皇大驚、特欲遣使去問尊候。適有一簪纓侍玉座。此郎素为国師見知。便差趨謁、兼令宣問。和尚百年後、当与誰人商略仏祖大事、願開指教。国師対曰、吾嗣法弟子雖有許多、實得吾道髓者、唯慧玄藏主一人而已。伊天然風顛漢、居止(一四)不定。陛下請降宣詔問之。使者帰奏。即日下宣麻于四方、搜索山林。東濃有溪山幽僻境、一衲庵居焉。天使聞得而怪。遂往拝謁。才一見便識為其人、仍具伸宣旨。師不肯起。天使再三勸諭、且励曰、国師戢化。其誰為大法主盟。和

(一四)『別考』「古写本、作_ル于居_ニ止、不可也」

↓『諸祖伝』「居処」

↓『流布本』「居止」

⑤直到離宮、上皇大悅。乃勅中使宣諭曰、朕捨此離宮作伽藍、當請和尚為開山始祖也。和尚答曰、吾雖不肖、既應勅宣而到来。一切悉合順旨焉耳。上皇仍遣甘露寺大納言(一五)往大德寺、宣言曰、朕將捨花園宮室而為禪刹。国師願賜山号寺号(k)。国師即便準拈花微笑之故事、而山号正法寺名妙心。所謂往昔梵王獻花于大覺世尊。々々便对百万人天衆拈花。衆皆罔測。迦葉一見破顏微笑。世尊即言、吾有正法眼藏、涅槃妙心。尽付囑摩訶大迦葉了也。按此両号端的、上皇以擬梵王、花園以擬獻花、国師以擬世尊、開山祖以擬師兄上足大迦葉也。正法山妙心禪寺起于花園帝宮殿之来端。可謂尽善尽美矣。

(一五)『別考』「不可也。古写本、作于藤公、可也」

↓『諸祖伝』「大納言」

尚豈忍高枕安眠乎。矧上皇在華園離宮、以旦夕埃象駕。匪啻簡在宸襟、亦国師所可囑也。師於是瞿然而作曰、子之言然也。吾行矣。輒俶裝徑入。

⑦直謁離宮、天顏大喜。即遣中使伝詔、朕要捨此離宮為清淨伽藍。合請和尚為開山始祖。唯願聽許。对曰、貧道雖不敏、既應宣詔得得来。百事唯命也耳。大称旨。先是上皇命甘露寺丞相藤房(一五)詣大德寺、具陳叡情。朕將捨華園而作蘭若。當請関山令住持。宓請預賜山号寺号。国師便用拈花微笑機縁、号山曰正法、名寺為妙心。蓋是関山為国師上足。故以擬迦葉師兄。上皇捨華園為寺。故以擬梵王獻一枝也。大率華園大上法皇草創正法山妙心禪寺之来端。可謂尽善矣。

↓「流布本」「藤房」

(k) 「上皇：寺号」Ⅱここでは、関山が伊深での隠栖から京都へ戻った後に宗峰より山号・寺号を与えられたと記録する。しかし、「行実記」を始め、諸本皆、関山が伊深での隠栖中に宗峰より山号・寺号を与えられ、宗峰示寂後に帰京したことになるっており、齟齬が生じている。

⑥ 所以上皇又於丈室後宮作尊院、而号玉鳳院。濃州有五所院領、勢州又有之也。又山門寺產諸州莊園、凡皆染宸翰以為契券焉。自河州守口網代莊・泉州宮里郷・津州有馬郡・江州黒田古橋石作莊、至九州豊前白木部搗等、若于所之。宸奎秘在于今昭々然也。開山祖塔号微笑庵。乃是開山祖師在世時攸自名也。但州七美莊為開山塔領也。

微笑庵前有両泉、在東名江谷、在西名風水。蓋亦祖師自名之也。庵之北有亭曰得句亭。又名丈室云拈花、扁書院云見麼軒。開山祖在世之時、息一衆三時持誦經呪、一向唯以本分事接人而已。清衆不過一百員、尽是大方叢林精鍊衲子也。晨鍛夕鍊、鎚弘無倦也。

⑧ 厥後移玉座於萩原。故奉号萩原法皇。又重遷于華園、於方丈後起玉鳳院以棲息。於是將濃州五箇庄属院充御厨也。凡山門莊園碁布諸州者、皆用綸旨為契券。河内守口網代莊・泉南宮里郷・摂津州有馬郡野上・近江州黒田古橋石作莊・九州豊前白木部搗・周防宮時等也。宸翰勅宣秘在于今而昭昭然。又本山東北有林丘、其塔号微笑庵。即開山塔也。環塔皆松筠蓊鬱而遶庵前。有両井、東名江谷泉、西名風水泉。北辺有得句亭、丈室之額曰拈華室、書院曰見麼軒。咸開山祖所嘗扁也。朝廷寄附但馬州七美庄、為燈油田也。祖師平日不要三時行事、終日端居一室、以本分接来学而已。登師門者、多是叢林精鍊衲子、或皆江湖飽參情流。師痛勘驗之故、清衆恒不盈千指。然天下

称法窟之冠、必指紫野華園也。鳥摩利云刹云、巨広矣云乎。衆云衆云、雜沓矣云乎。〔後來皇親宗室拝塔、出家両三輩。明江叔和尚以皇子故、曾住持本山非嗣法、而住

⑦前所謂使大德簪纓族者、蓋伊勢齊宮明神后後胤也（一六）。多芸多才、博覽古今、花園・後醍醐之兩朝大振聲名。且自幼年見國師參禪旧矣。而復親授衣盂。名云宗弼、字云授翁。其初稱播摩守、後号宰相中將。當時開國師謂開山祖得吾道髓之一言、還奏花園帝了、自抽利刀截髮為僧。法諱道号不改、國師所賜也。開山祖師晚年命宗弼上人作投機頌即呈偈、祖師句句与一撈。其答如円石転千仞之坂。遂到其末句、祖師援筆大書云、上人今日大徹大悟。邇來開山祖師座下、旧參衲子甚多、僉指嗣弼上人。是故嗣祖師法者、唯弼上人一人也。

（一六）『別考』「不宜。古写本、作于宰相中將藤氏、為是正」

↓『諸祖伝』「伊勢齋宮明神后後胤也」

↓『流布本』「黃門侍郎藤房」

⑧祖師入滅後、弼上人繼踵住持。弼下有華藏曇・雲山

茲山者、古來唯明江一代焉耳。

⑨前所謂一簪纓郎乃黃門侍郎藤房（一六）也〔詳于授翁伝〕。此郎素博聞強記、以才芸鳴一時。文保元亨之諸儒、莫出其右者。元亨末、上与儒臣以暇日講論經義。時黃門見称社中翹楚。且蚤見國師參禪入室、親受衣盂。法諱宗弼。國師一夕夢親握其手、覺而異之因。字曰授翁。取仏仏授手、祖祖相承之義也。向者奉宣使、詣國師聞得玄藏主得吾髓之一言、還奏聞了、遂自斷髮為僧。待関山応宣旨來、開此山之日、便投法席、旦夕參詳、親灸誨勵。一日豁然大悟、呈投機頌。祖於句句与一撈。答話如響応。祖援筆大書紙尾曰、上人今日大悟大徹矣。次日謂衆曰、諸禪德要我者随弼上人去。其時開山会裏旧參耆英頗多。至是皆依師化下。故開山法嗣只授翁一人也耳。

⑩開山順世、禪師繼踵為第二世矣。禪師下、有雲山義・

義・無因々・拙堂朴、皆相次住本山。拙堂住院時、防州大内義弘（一七）多年与拙堂有師檀旧約。応永末、義弘謀叛。割拠泉州堺（一八）与官軍拒戰。無何義弘自殺。泉州遂平。拙堂曾依為其方外友。雖法山無咎、為罪住持故、自將軍家奪却妙心封疆并諸国寺産付与青蓮院。三年後、又取之割分、以付龍雲廷用和尚、自余寺産散与諸方了也。到応永末（二二）、此寺尚被化領殿堂蕪沒、林苑荒廢。只開山祖塔巍然而存耳。

（二七）『別考』「古写本、作于大内氏」

↓『諸祖伝』「防州大内義弘」

↓『流布本』「防州多々良義弘」

（二八）『別考』「古写本、堺ト本文ニ有リ、ヨシ」

↓『諸祖伝』「泉州堺」

↓『流布本』「泉州」

（二九）『別考』「古写本、鹿苑院殿天山大相公ニ作ル」

無因因・拙堂朴、接武住本山。華藏曇・有鄰德、亦各旺化一方。然拙堂以応永初住山。同六年己卯之冬、防州刺史多多良義弘（一七）「号大内」謀叛、割拠泉州「境」（一八）、与官軍拒戰。拙堂与義弘、曾有師檀好。鹿苑院大相國義滿公（一九）窃聞焉。少頃官軍大克。義弘自刎、泉州既平。相公猶嫉彼凶毒、欲掃其孽余。而官軍凱旋之日、諸將或訴相府曰、妙心拙堂混於賊虜馳突軍中。与賊同罪。相公領（二〇）、雖云寺無咎、為罪住持人移怒華園、敕取封疆、籍沒諸庄寺産、併以畀青蓮教院。粵三年復令悉收録割七所、分付龍雲廷用和尚、自余莊園亦散与諸方了也。至永享初（二二）、此山尚被他門領、不安僧衆、賸毀取殿堂。園林黃落、鳥下平蕪。唯微笑祖塔巍然存焉耳。

↓「諸祖伝」「ナシ」

↓「流布本」「鹿苑院大相国義満公」

(一〇) ↓「別考」「領字ノ下、古写本、之ノ字在リ」

↓「諸祖伝」「ナシ」

↓「流布本」「相公領」

(一一) ↓「別考」「雪江和尚草本ニハ永享元年頃トアリ」

↓「諸祖伝」「到応永末」 *但し場所を異にするも、次段冒頭に「永享元年之比」と見える。

↓「流布本」「永享初」

⑨ 永享元年之比 (一一)、廷用和尚、一日召吾門宗利西

堂謂之曰、花園妙心寺、公之祖師遺跡也。曾以釣命賜我、

今將還付焉。西堂宜報同門諸老、如昔年建立寺宇也。利

公点頭而還、輒相告門下諸老。々々胥議一列、遣專使請

日峰和尚。入滅後、期二十五年忌宗深預白、禁裡望禪師

号。所以時勅諡禪源大濟禪師。日峰和尚再興正法山

(一)。

(一)

入滅後：再興正法山流布本他、他の「六祖伝」諸本には見えない記述である。冒頭の「妙心禪寺開山禪源大濟禪師行狀」の項でも述べた通り、日峰宗舜にこの号が与えられたのは、日峰二十五回忌を迎えた文明三年（一四七一）のことであり、本書が記された応仁元年（一四六七）から四年後のことであつて、後の加筆であることは明白である。ではこの加筆は一体誰によつてなされたものであろうか。本書が応仁元年に成つた後、文明十年に東陽の下に移るま

⑪ 一日廷用和尚、召南禪宗利西堂謂之言、華園妙心寺者
偈祖師遺迹也。年来以釣命賜我。我今当還之西堂。宜報
同門諸老。收拾合浦珠可也。利公珍重而退。於是門中耆
老散處雒涯者會議而道、興廢應憑宗師道力、宣光之才良
難哉。方今日峰和尚旺化青龍山。人天攸帰敬也。中興主
盟非這老而誰歟。僉曰、可輒遣專使起禪師於尾之瑞泉、
住持本寺。庶幾道德所感、伽藍頓現、如觀史夜摩之從天
而降。

でに十年余りの歳月が経過している。あるいは雪江自身が師への報恩の意味を込めて加筆したとも思える。因みに、『雪江語録』に収められる「瑞泉開山日峰和尚賜徽号拈香」は以下の通り、「触者三尺竹篋、幾多辛辣。喫却三頓痛棒、多少艱難。怨入骨髓難遮掩、旧冤為報并梅檀。恭惟、開山祖師、日峰老漢、生前莽園、死後瞞頂。凌滅鷲峰正宗、驚面呵仏祖、疏鑿天源正脈、平地起波瀾。宝山捧贄時、喚蛇作龍眼既瞎。花園匡徒處、指桃罵李機何完。晦養軒前、雲低遠塞鳴寒雁、養源塔下、月移花影上欄干。一生泥在無明窟、百般玩弄業識團。何幸、今上皇帝、特降下綸音、勅諡禪源大濟禪師。慚汗慚汗。正當今日、望闕謝恩一句、如何涉言端。(拈香云) 手把少林無孔笛、等閒吹起万年欵(挿香)」(平野宗淨編『雪江宗深語録』・妙心寺大法会事務局・一九八四年・p.64)。

⑩峰固辞再三、門下尚敦請不已。峰竟領命焉。永享五年、日峰和尚已入院。先造函丈、又条微笑塔、亦住退藏及我養源二塔頭。其間自家以江州黒田古橋石作庄、泊河州網代庄、還附本寺。少頃而復為龍雲見豪奪。文安北、自將軍家以濃州郡上上保新被寄附。雖然依太守僚属為妨其貢無納也。其惟、花園太上法王雖為根本大檀越、世以不知重之。右京地源元素崇仰開山宗風。是故請勝元為山門外護。時住持義天和尚也。其後雪江老衲以衆望薰蒞茲席。此時郡上復貢。成而後被回奪也。

⑪然師固辞者再三、門中尚敦請不已。師竟領命既已入寺。

綿叢野外、講旧礼楽。先造函丈鉗鎚學者。次莊嚴微笑之塔、以備于人天瞻礼。稍宮退藏院、又自創小院於山堂傍、号曰養源。就于塔基為婦藏之地。數年間叢規粗備矣〔禪師遷化後、門中以公議建中興開山牌子祖堂〕。後華園院(二二)嘉吉中適有公命、以江州黒田古橋石作郷、泊網代庄、見還附本寺。無幾日復為龍雲被豪奪。文安末、太人相公自割將軍家封邑一所以新寄附〔慈照院准后義政公(二三)〕。乃濃州郡上上保是也。然焉太守僚属又作之障、厥貢弗納。有者道、顧吾山從延慶文保以降、忝為勅願寺、何故屢為樞家見擠耶。所謂天乎人歟、不可以測之。嘆尤矣。斯言有者道、不然若言仏法迍難、莫過於三武廢教。是猶若日月蝕爾。何況於世間法乎。詎庸足憂也。且夫人

(二二) 【別考】「古写本ニナシ」

↓ 【諸祖伝】「ナシ」

↓ 【流布本】「後華園院」

(二三) 【別考】「古写本、作「慈照院殿」

↓ 【諸祖伝】「ナシ」

↓ 【流布本】「慈照院准后義政公」

⑪ 応仁元年之夏、天下大乱、平安城上、陳雲昼霾。一日凶党乱入寺、而殿堂尽打破、林苑竹木皆被斬除。倏忽間、頓成荒墟矣。夫花園法皇以離宮為禪刹。宸翰炳然矣。定応有諸聖天龍照鑑。然則花園再栄宮寺、復旧合如指掌而

多勝天、天定亦能勝人。其唯時運哉。至若世道殺乱則正法之罹迍難、蓋亦時也。

⑬ 大凡朝堂之議、專用寬裕以御天下。然下愚無近天威故、不知所以其可畏。往往輕天子勅、重將軍令。苟非武家禁訶、犯法者儘多。将奈像季何。源京兆勝元為累代執權。而蚤欽仰宗門、特慕吾開山祖之芳烈、參見義天先師。先師董蒞茲山之日、便請京兆為山門外護。以謂法山永得金湯固矣。先師去世後、宗深補席。是秋郡上上保租稅纔貢。然未廻踵、即被復回奪。以權倖押妨也。

⑭ 今上改元応仁。丁亥春夏之交、天下大乱、平安城上、陳雲昼霾、華蓋蒙塵、兵火連月。一日凶虜大襲山門破堂舍屠林丘。倏忽間寺成曠墟矣。時老衲避兵戈逃於丹之米山。忽聞華園廢、莞尔而笑且謂衆言、二三子勿歎焉、是

已矣。

⑫珍重、宗深雖率尔、本山来由、或聞門中宿納說、或聽方外士人談。亦顯於花園宸染、亦現於無因祖指図。仍略集大略以待来。哲是正也。其余細事、不足載之。

応仁元年九月廿七日 住山宗深記焉（二四）

細事也。夫昔法皇革離宮為禪刹。宸奎於今懔懔然。諸聖龍天不敢護惜也乎。万乘願輪、杲日麗天、終無成滿期也乎。興廢有時、華園不復春也乎。皇運法運一時勃興、可翹足而俟矣。祝祝是為記。

⑮文明年中先師在都下、撰妙心寺記洎開山行実記。英朝居於丹之米嶠。遠寄來見示、且命曰、得間校正別謄一本來、毋謙讓惟幸。弗免謹如教矣。粵明年春師忽中風。諸子倉皇參覲、某亦趨庭下。而師在病床嬉笑怒罵、都無別事。唯痛嘆宗綱已遂而已。旋涉彫削。尊候有間遂捫掖四世諸余、呂成一藁、留在骨董箱中。恰似待後世子雲者。先師去世後、特芳法兄在龍安、兼領法山席。住持事繁。偶視遺藁欲囑累於余。余時感沈痾。手戰於筆、眼眩於書、以故固辭矣。延德初、幸奉綸命、猥董蒞茲山。一日檢校衡梅書籍之次、無端撞著這未了公案。寔殃及兒孫者哉。猶予間、華園三霜之期滿矣。懷之婦老濃陽。庵居閑適無事。便漫弄青氈、以償旧債焉耳。於是先師行実未曾有記者。夫奈蜂桶羊何。窃思、居常茶話余、多談出世始末。聞所不聞、見所不見。何況一棒一喝、中毒知毒。此皆先

師実録也。仍記概略以系于第六世、目曰正法山六祖伝。

此外、上堂・小参・偈頌・小仏事、見于語録。皆明応五年丙辰春王正月日、嗣法小師英朝炷香百拜謹書于岐山下。

(二四)『別考』「応仁元年九月廿七日、住山宗深記之トアリ。丹州八木龍興寺ニテカキナサレタト見ルナリ」

↓『諸祖伝』「応仁元年九月廿七日 住山宗深記焉」

↓『流布本』「ナシ」

ま と め

以上、『禪林諸祖伝』所収、「行実記」「妙心寺記」を活字化し、その上で流布本『六祖伝』『関山』章・「妙心寺記」との比較対照を行った。結果的に記述の順序を含め、その内容にも大きな相違のあることがわかった。

では、本書が本当に草山が覽たという『諸祖伝』所収「行実記」「妙心寺記」であろうか。各段の末に付した草山の指摘と、本書と流布本との対校は殆ど一致している。ただし一部一致しない点もあることから疑問も残る。特に最も重要な問題である、関山の生年に関する「年垂三十」という記述は、本書においても「五十」では無く「三十」であった。草山が本書に拠る最も重要な点が相違することは大いに問題であると言えよう。

関山伝の最大の問題点である、関山の生年に関する「年垂三十」は「五十」では無かったのか。関山の生年とされている建治三年説は、当該箇所が「五十」であることを根拠として成立しているものであるから、雪江宗深の草本が「三十」であるということになれば、大きく関山の伝記を訂正せねばならない。また『諸祖伝』には、『六祖伝』に

見える関山の寂年「延文五年」という記述も無い。これは東陽が加筆したことは明らかである。

また標題を日峰の諡号である「妙心禅寺開山禅源大済禅師行状」としたり、明らかに応仁元年（一四六七）以後の加筆と思える箇所があることなど、疑問点も多々見られる。しかし、草山の指摘とはほぼ一致することから、たとえ草山が覧たという『諸祖伝』では無かったとしても、同系統のものであることは間違いないだろう。そして、本書の内容の粗雑さが、却って本書が『六祖伝』の草本であることを物語ってよいよう。

そもそも雪江は、寛正三年（一四六二）二月、五十五歳で義天より印可を与えられる迄は修行の日々であった。しかし義天の寂後、直ちに雪江は龍安寺と妙心寺を嗣ぎ、更に同年八月、大徳寺で開堂の儀をあげる。やがて応仁元年三月、雪江は尾張の瑞泉寺に入寺し、帰洛して応仁の乱による被害を目の当たりにし、やむを得ず丹波の龍興寺に移って妙心寺再興の為に万策を尽すこととなる。その後、文明五年（一四七三）には、雪江は応仁の乱からの再建成った大徳寺に再住し、妙心寺と大徳寺の和合に努める。このように「行実記」「妙心寺記」が記された頃の雪江は多忙で、またその周辺は非常に混乱したものであった。

流布本『六祖伝』『妙心寺記』の跋文によれば、「行実記」「妙心寺記」を著わした雪江は、その後、文明十一年（一四七九）の暮春、中風を患うものの、療養の一方で、授翁・無因・日峰・義天等の四祖の伝記史料の収集に努めて一稿としたようである。しかし、文明十八年（一四八六）六月二日、雪江は遂に示寂する。

その時、妙心寺の住持でもあった特芳禅傑は、偶々雪江の遺稿を見つけ、東陽にその成稿を依頼するのである。しかし当時の東陽もまた病の床にあり、一旦は特芳の依頼を辞するも、後に衡梅院所蔵の書を点検校合するに当り、雪江の遺稿を目にすることになる。やがて東陽は、明応元年（一四九二）十一月二十八日、美濃加茂郡細目郷（岐阜県加茂郡八百津町）の不二庵に入寺する。そこでの東陽は、自ら「妙心寺記」の跋文中に「庵居閑適無事」と述べているように、穏やかな日々を送っていたようである。次いで、山県（岐阜県）の法雲山定慧寺に入寺した東陽は、遂に雪

江の収集した史料をもとに、授翁から雪江迄の五祖の伝と、雪江による「行実記」「妙心寺記」とを併せ、先述した通り明応五年に『六祖伝』を脱稿し、更に文亀元年（一五〇二）十一月二十七日に到って、『六祖伝』一卷に、東陽自らの法系に連なる祖師二十三人の伝を記した十二巻をあわせた『宗門正燈録』十三巻を完成させることとなるのである（寛永三年刊。後、寛永七年に『六祖伝』のみ省かれ十二巻本となる）。

「行実記」「妙心寺記」を著した頃の雪江に比べ、東陽の方がより執筆に集中出来る環境にあった。応仁の乱前後の慌しい時期に著された雪江の草本が、ある程度乱雑なものであったことは推察できる。そしてその雪江の草本に、落ち着いた状況の中で丁寧な潤文校正を加えたのは東陽英朝であった。

但し、東陽の校正によって削除や訂正された部分が、何故に改められねばならなかったのか、その理由が判然としないことから却って不明な点も残された。しかし、雪江の草本とされる本書が明らかになった今、先の関山の生年の問題を含め、改めて今後の課題とせねばならないであろう。

(1) 関山伝を研究する場合、雪江宗深撰述となる『正法山六祖伝』関山章が基本となり、それに加え、草山祖芳『樹下散稿』四巻、『六祖伝考』二巻、此山玄淵『正法山六祖伝考』一卷、『六祖伝』とは別系統の関山伝となる応禅普善『関山国師別伝』や、覚印義諦『天沢東嵐録』一卷、高泉性澈『扶桑禅林僧宝伝』、正元師蠻『延宝伝灯録』『本朝高僧伝』や無著道忠撰『正法山誌』等が参考資料となる。更に第一史料として印状や文書類が存する。これらを元に近代以後、川上孤山『妙心寺史』、釈仏海編纂『妙心寺開山勅諭無相大師御伝』、天袖接三

『妙心寺六百年史』、柴野恭堂『妙心開山無相大師の御生涯』、荻須純道『無相大師』、同『日本中世禅宗史』等が著わされ、また近年、加藤正俊氏によって多くの疑問や新説が提示されてきている。

(2) 本書は、此山玄淵が、寛永版刊行以前の写本数本をもとにし、更に『別考』等を参考にして校勘を加えたものである。なお、此山は他に寛永版の『六祖伝』に注釈を加え、『正法山六祖伝考』と題したものもある。それは本書の凡例に、「旧版本文字、或段節、稍紕繆之處、今撰^リ古写本ニ而校訂筆削。然^ル其処処一一、注^ス判^ス之^ヲ」

則却覺^ツ混淆^ツ。是^レ故止^ニ矣^一」とあることから理解できる。

また同じく凡例に「古写本之冠註傍通、及別考諸書会而為^レ編者有^レ之。目曰^ニ法山六伝考彙^一、今標註省而書考彙^ニ者是也^一」とあることから、あるいは「再版六祖伝」の他に「考彙」が存在したのかもしれない。しかし他に別本としての「考彙」は見当らず、また花園大学に現存する「六祖伝考彙」と表紙に書される荻須純道氏による複写本一本は、まぎれもなく「再版六祖伝」であり、このことから、荻須氏は「再版六祖伝」を「考彙」であると考えていたようである。ここでは荻須氏の判断に従う。

(3) 以上、佐々介三郎の考証については、但野正弘「新版・佐々介三郎宗淳」(水戸史学会・一九九一年)参照。

(4) 「歴朝陵考」は、おそらくは「列聖山陵考」(元禄十年「二六九七」刊)のことであると思われる。これは天皇陵のことを記した書であるが、詳細は不明。

(5)

徳川光圀が、自らの所蔵する史料を隠さない意向を持っていたことは、前田綱紀に宛てた次の書状(元禄六年西六月七日付)からも明白であろう。「此方所持申候記録共、少も秘密ニ而ハ無^ニ御坐^一候、……若火災ニ逢候而も、一方に残候へは互ニ又写も致物ニ而候故、有志方へハ為^ニ写置^一申度事ニ而候へは、旁以^ニ不^レ致^ニ秘書^一候」(『水戸義公全集(下)』「水戸義公書簡集」所収)。ここで光圀は、秘密主義の排除と副本の作成とを説いている。このことから、綱紀に本書を貸借した理由も理解出来るし、綱紀が書写した理由も理解出来る。

(付記)

『禪林諸祖伝』の閲覧に際しては、曹洞宗・天徳院様に御快諾賜り、又実際の閲覧に際しては、曹洞宗文化財調査委員会(主事・松田陽志氏)諸氏の御手を煩わせることとなった。ここに衷心より御礼申し上げます。